

伊沢修二の「嬉戯」に関する一考察

高 橋 春 子
岸 本 幸 子
木 村 吉 次

1. はじめに
2. 伊沢の「嬉戯」の実践
3. 伊沢の教育観
4. わが国への幼稚園の紹介と唱歌遊戯
5. 結 び

1. はじめに

伊沢は、明治7年3月、24才で愛知師範学校長に就任した。この愛知師範学校長時代に彼は下等小学教科に「嬉戯」を設け、わが国に、はじめて唱歌遊戯を起こすことを試みた。

師範学校の文学、地理学、史学の教官であった野村秋足に作らせた唱歌、「胡蝶」は、ここで生れた。この歌は、「蝶々」として今日でも人々に愛唱されているものであるが、この他にも、いくつかの簡易な唱歌をつくり、幼児や師範学校の生徒にも試みたのである。

伊沢が下等小学の教科に「嬉戯」を取り上げたことに関しては、これまでの体育史研究において種々の見解が示されている。

木下秀明氏は、「小学校低学年での体操実施には、幼児に対する体操の強度の点から、発達段階に応じて体操よりも、音楽リズムにあわせた一斉運動、すなわち、マス・ゲームの傾向をもつダンスを主張した」¹⁾として、対象の発達段階を重視して、マス・ゲーム的なダンスが適していると考えて、「嬉戯」を取り上げたとしている。

また、岸野雄三氏は、「伊沢は、体操が珍重されていた文明開化の時代に、大人の体操を子

供に課することは無理であることを説き、しかも単なる外来遊戯の模倣に終らず、当時としてはすばらしくこなされた歌詞をつけて、唱歌遊戯を奨励している」とし、さらに、「彼の嬉遊法は愛知師範、その他の一部の学校で多少実施されたし、それに低学年の体育指導の難しさを、日本的に打解した最初の試みとして、歴史的な意義をもっている」²⁾と評価している。

今村嘉雄氏も、それまでの遊戯は組織的な遊戯としての形式を十分見えていなかったのに対して、伊沢が、教育的な意図をもって小学校で遊戯教育を試みたことを高く評価している。³⁾

さらに、戸倉ハル氏は、伊沢の実践を、幼児のためのあそびの必要性を感じたことによるものという見方をしている。⁴⁾

以上、伊沢の「嬉戯」の実践に関して、これまでに歴史的な意義づけを行ってきた諸氏の見解をみたわけだが、このうち、木下氏と岸野氏は、「嬉戯」を小学校低学年の体育の試みと評価しているのに対して、今村氏と戸倉氏は、遊戯教育の実施として評価しているというように、若干異なるとらえ方をしていることが明らかである。

従来、伊沢の「嬉戯」の実践は、あまり他のものとの関連において考察されることがなく、単独的に扱われがちであったのに対して、筆者等は、それを当時の内外の幼稚園教育の事情に関連させるとともに、いま一面において伊沢の教育観についての若干の検討を行うことによって、伊沢の「嬉戯」の実践の意義をより明確にしたいと考えるものである。

2. 伊沢の「嬉戯」の実践

伊沢が、愛知師範学校長時代に実践した「嬉戯」の実際は、愛知師範学校年報に掲載されている文部省への報告よりうかがい知ることができる。この報告の「嬉戯」に関する部分は次のようである。

将来学術進歩ニ付須要ノ件

唱歌嬉戯ヲ興スノ件

唱歌ノ益タルヤ大ナリ。第一知覚心経ヲ活発ニシテ、精神ヲ快樂ニス。第二人心ニ感動力ヲ発セシム。第三発音ヲ正シ、呼法ヲ調フ。以上ハ、幼生教育上、唱歌ノ必欠ク可カラサル要旨ノ概略ヲ挙クルノミ。其細目ノ如キハ喋々此ニ辨セス。我文部省早ク此ニ見アリテ、小学教科中唱歌ヲ載スト雖ドモ、未タ実ニ其科ヲ備フルモノアラス。今吾輩西洋ニ於テ、著名ナル教育士、フレーベル氏其他諸氏ノ論説ニ従ヒ、先本邦固有ノ童謡ヲ折衷シテ、二三ノ小謡ヲ制シ、日ヲ累ネ年ヲ積テ、大成全備ノ効ヲ奏センコトヲ期セリ。即チ其一二例ヲ左ニ示ス。唱歌ハ精神ニ娛樂ヲ与ヘ、運動ハ支体ニ爽快ヲ与フ。此二者ハ教育上並ヒ行レテ、偏廢ス可ラサルモノトス。而シテ、運動ニ数種アリ。方今体操ヲ以テ、一般必行ノモノト定ム。然レ共年令幼弱筋骨軟柔ノ幼生ヲシテ支体ヲ激動セシムルハ、其害却テ少カラスト。是レ有名諸家ノ確説ナリ。故ニ、今下等小学ノ教科ニ嬉戯ヲ設ク。即チ、左ノ図ニ因テ其一二例ヲ示明ス。

図（略ス）

椿 唱歌

椿ヤ椿。椿ノ花カ開イタ。中ノ心マテ開イタ。椿ノ花ハ。萎ム時モアラウカ。開ケタ御代ハ。八千歳ノ春マテモ。萎ム時ハアラシ。

技 態

此戯ハ群兒五分ノ一ヲ椿ノ花ノ心トシテ中央ニ蹲アラシメ、相互ニ手ト手ヲ連ネ合ヒ肩摩固結セシム。他ノ兒モ亦如斯シテ花心

ノ外圍ヲ回繞ス。花心ノ兒同声ニ椿ヤ椿ト音頭ヲ揚レハ、衆兒之ニ次テ亦同シ句ヲ唱フ。椿ノ花カ開イタ。ト謡フ時、衆兒和唱シナカラ起テ、一人圓隊ヲ為ス。萎ム時モ云云ト謡フ時、先ノ如ク密合一蹴ス。開ケタ云云ト謡ヒナカラ、大小圓ノ形ヲ為シ、謡ヒ終レハ、一拜シテ止ム。（至幼ノ遊戯トス）

胡蝶 唱歌

蝶々蝶々。菜ノ葉ニ止レ。菜ノ葉ニ飽タラ。桜ニ遊ヘ。桜ノ花ノ。栄ユル御代ニ。止レヤ遊ベ。遊ベヤ止レ。

技 態

右ノ手ト右ノ手トヲ執替ハシテ、向背相反シ、兩兒ヲ一蝶トナス。凡十五名ニ一羽三十名ニ二羽ホトヲ度トス。衆兒ハ互ニ手ト手トヲ引合ヒ、一人圓ヲ造リテ輪走ス。彼蝶ハ、私転シナカラ圓外ヲ公転ス。圓兒ト蝶兒トハ逆旋スヘシ。二羽ナラハ左右ニ位シ、四羽ナラハ四隅ニ位シ、一齊ニ唱吟シ、出ルヲ期シテ転旋ヲ始ムヘシ。且謡ヒ、且走リテ、結句ノ止レト云フ詞ト共ニ、出遇フ所ノ圓兒ノ執合ヒタル手ヲ執フヘシ。執ハレシ者ヲ再度ノ蝶トス。

地球の自転シテ太陽ヲ周回スルニ倣フ地動説ヲ教フルニ及ンテ、此喩ノ一助タランコトヲ要ス。

鼠 唱歌

矢ヲ取ロ、矢ヲ取ロ、大矢ヲ取ロヨ。野中ニ射込シダ。大矢ヲ取ロヨ。内ハホラ々々。外ハスブ々々。鼠ノ窟ニ御匍入ナサレ。火ハ燃過テ。御矢ハ御手ニ入ベシ。命矢ヲ取ロ々々。鼠御匍入ナサレ。御矢ハ御手ニ入ルヘシト幾度モ疊謡スヘシ。

技 態

一兒ヲ大己貴命ニ擬シ、一兒ヲ矢ニ擬シ、衆兒ヲ鼠トシテ、二人ツ、手ヲ率合ヒ、一人ヲ容ルヘキ程ノ間隙ヲ開キ、矢ニナリシ兒ヲ中ニ置キ、円形ニ回繞シテ輪転ス。命ニナシシ兒ハ、圓外ニアリテ、同シク輪走シナカラ、矢ヲ取ロ々々云云、大矢ヲ取ロ

ヨト謡へハ、鼠等一声ニ内ハホラ々々云云。御匍入ナサレト云フニツレテ、其間隙ヨリ入ラントスレハ、入ラセジト身ヲ寄せ合セテ、是ヲ禦クコト定数ナシ、幾度モ謡ヒ返シテ終ニ入り得テ、矢ノ児ヲ執フルヲ一関トス、其匍入レタル左右ノ児、一ハ命トナリーハ矢トナルヲ再遊ノ式ト定ム。

古事記云、鳴鏑射入大野之中令採其矢故入其野時、即以火廻焼其野於是不知所出之間、鼠來云、内者富良々々外者須夫々々如是言故踏其處者落隱入之間火者焼過爾其鼠昨持其鳴鏑出來而奉也（此文ニ准フ）⁵⁾

このように、彼は、1、知覚神経を活発にして、精神を楽しませること。2、精神的感動力をよびおこすこと。3、正しく発音し、呼吸を調整すること。の3点において唱歌の教育的意義を認め、その小学教科としての必要性を主張している。

これと同時に、「唱歌は精神に娯樂を与え」「運動は支体に爽快を与える」ものであり、此二つは、教育上平行して行われるべきものである。ことに、身体的に未熟な幼少の者に、強度な体操を実施させることはさけるべきであり、幼少の身心に適した運動として、唱歌と運動の結合である「嬉戯」こそ、下等小学の教科に最もふさわしいものである、と述べている。

そこで、この「嬉戯」の具体例としてあげられているものをみると、その性格を特徴づけるものは、次のようである。

1. 模倣的表現

椿では、大小円の形をなして、椿の花の形を表わし、密合したり、一大円隊をなしたりして、椿の花の開閉を模倣表現している。

蝶々では、二人一組で一蝶となり、自転しながら公転して蝶の舞う様子や、メンバーチェンジしてとまったり、遊んだりする様を現わしている。

2. 具体的題材

子供のよく知っている具体的な題材の中か

ら、美しいもの、楽しいもの、興味深いものと考えのを選んでいる。

3. 隊形

椿では、二重円の幾何隊形で集合と散開の隊形移動して表現し、蝶々では、一円を中心に四方又は二方に点対称に幾何隊形をつくり、円児と蝶児は逆方向に移動している。

4. 遊戯性

蝶々では、「且謡ヒ且走りテ、結句ノ止レト云ウ詞ト共ニ出遇フ所ノ園児ノ執合ヒタル手ヲ執フヘシ。執ハレシ者ヲ再度ノ蝶トス」として、子供の心を楽しませるような、遊戯的な表わし方をしている。

鼠では、さらに遊戯的色彩が強い。

5. 劇的表現

鼠にみられるように、「一児ヲ大己貴命ニ擬シ、一児ヲ矢ニ擬シ、衆児ヲ鼠トシテ……」とあるように、各児が役割をもって演じている。

6. 比喩的表現

胡蝶の附説での地動説のように、動きと空間構成の中に比喩的表現をとり入れ、知育への興味づけを試みている。

以上のような性格をもった「嬉戯」によって、伊沢は年長の児童とは異って、あくまでも幼児のためということ心を心がけ、簡易で素朴な、親しみやすいような唱歌と動きをもちいて、幼児の自然の活動欲求を導き、心身の発達をはかるうとしたのである。

晩年、この「嬉戯」の成立事情について、伊沢自身は次のように語っている。

「考えて見れば、丁度、今より二十六、七年前、明治七年頃、……。フレーベル氏が、大教育家であって、子供に唱歌遊戯を授け、子供のアクティビティー……活動性とでもいふですか……を養ふを主義として居ることを知り、そこで、我日本の学校にも、それを起すが必要であると云ふ考から、……。

要するに、フレーベル、其他の教育者のいへる如く唱歌遊戯は大人の気に入る訳ではなく、子供の心情にたち入り、子供の楽となり、子供の為になるものであるべき真理は変わらないので

す。かく私が述べたのも、いささか古きを尋ねて新しきを知るの材料にもならむかと存じて御咄いたしましたわけであります。」⁶⁾

これはすでに幼児の遊戯教育が定着した後年における回想であって、そのねらい、指導原理といったものも世間一般に受け入れられ、幼児教育の基本となった時代の言であるから、洗練された表現になっていると考えられるが、彼が師範学校長当時とりくんだ「嬉戯」の特徴を、フレーベルの言を借りて簡潔にまとめている。とにかく「嬉戯」は、

1. 子供のアクティビティーを養うことが必要であり、
2. その手段として、唱歌遊戯を子供に授けることがよく、
3. その指導原理は、子供の心情にふれ、子供の楽となり、子供のためになるものであるべきこと

といった考え方を原理として成立していることが明らかである。

3. 伊 沢 の 教 育 観

伊沢の「嬉戯」が、フレーベルの思想、および実践と密接に結びついていることは、すでに前節で引用した、愛知師範学校年報及び伊沢の談話からも明らかであろう。

フレーベルは、唱歌遊戯を行うことは、児童及び彼らの将来の全生活を通して非常に有益であると説き、その一般的目標は、身体と精神の調和的発達であり、具体的目標としては

1. 規則的で節度ある生活を営むことができ、言語や粗野なふるまいの生活活動がなくなる。
2. さらに長ずれば、自然や芸術、音楽や詩を一段と解する心が発達する。
3. 身体の力や敏活さを養うことができる。
4. 身体の諸力が訓練されて、身体は美しく、端正な、礼儀正しい態度や動作が身につく。
5. 内面的な活動や生命力を純粋に表現できる。

6. 生命の模倣、実生活の諸現象の模倣、知的活動の模倣がなされる。
 7. 楽しく、思索的で創造的な生活を営める。
 8. 協調的で融和的な生活が営める。
 9. 無邪気で明朗な敬虔な子どもらしさを養える。
- 等である。

そしてそのためにも、子供の心と心情を正しく理解し、子供自身の立場から出発して、彼らの自然の活動衝動や生命力を正しく導き出し、子供の本質にふれた活動を与えることが大切である、と述べている。

こうしたフレーベルの児童観及び遊戯観は伊沢の感動をよびおこし、彼の以前からの教育観と一体化して共鳴し、「嬉戯」への試みにつながったものと思われる。

そこで、当時の伊沢の教育観をとりあげて若干の検討を行ってみたい。

1) 伊沢が教育に直接かかわりを持つのは、やはり、愛知師範学校長時代からといえるが、彼は明治7年7月、愛知師範学校開業式に臨み、校長としての告諭で次の様に述べている。

「余浅学非才ト雖モ、公命ヲ奉シテ此校ニ在リ、苟モ一朝諸彦ニ長タルヲ以テ、敢テ教育ノ真理何者タルヲ質サン。抑今日ノ教育ハ、大ニ古ノ教育ニ異ナリ、惟一般ニ、誦読吟詠習字等ヲ指シテ教育ト云ニ非ズ。之ヲ要スル均シク身体才智心気ノ三者ヲ教育シ、不偏不倚ノ良材ヲ得ルヲ以テ、其目的トス。故ニ唱歌体操ノ科ハ、以テ精神ヲ健快シ、材幹ヲ長成シ、支体ヲ強壮ニス。之ヲ身体ノ教育ト云。理芸法文ノ諸科以テ努力ヲ開発シ、才芸ヲ長育ス、之ヲ才智ノ教育ト云。修身性理ノ科以テ天理人道ヲ明ニシ、善惡邪正ヲ辨ジ、權利義務ヲ知ラシム、之ヲ心気ノ教育ト云。此三者ハ実ニ教育ノ枢要ニシテ、並行レテ相悖ラズ。然レバ則、盛化陋俗富強貧弱唯此三者ノ教育、能ク行ハルハト行ハレザルト、不偏不倚ノ權衡ヲ得ルト得ザルニ關センノミ。而シテ今其柄ヲ執ルモノハ、諸彦ニ非ズシテ誰ソヤ、嗚呼諸彦能ク此意ヲ体シテ報國盡瘁勉勵以テ国家ヲ助ケバ郁々ノ盛洋洋々ノ美

示源ヲ、此校ヨリ発センコト必セリ諸彦欽哉」⁷⁾

ここで伊沢は、旧時代の教育のように、誦読吟詠、習字等の読み書きのみが教育でなく、これからの教育は、身体、才智、心気の調和的発達をめざした教育こそ、最も重要であると説いている。

このことは、さらに彼の同校長時代の輯訳である『教授真法』の生理学の節において、

「研智ノ学ヲ教ヘテ育體ノ術ヲ設ケス、是偏重ノ教育無瑕ノ民ヲメ廢癩ノ徒タラシムル所以也」⁸⁾

ともかく、伊沢は、留学する以前に、すでに、このような教育観をもっていたことは、注目すべきことであり、その後、この考え方は一貫して彼の教育思想に流れるものとなるのである。

それは、彼が留学して後に、著わした『教育学』（明治15年）の中でも、同じ教育観を見出すことができる。

そこでは彼は、教育について、次のように述べている。

「教育トハ何ゾヤ。曰ク完全ナル人物ヲ養成スルノ術ナリ。人物即チ人トハ何ゾヤ。身体ト精神トノ二者ヨリ成立シテ、其靈万物ニ長タルモノナリ。今之ヨシテ完全ナル人物タラシメンニハ、其心力ト体力トヲ育成スルノ術、即チ教育ヲ施サザル可ラズ。

縦令ヒ其心力ト、体力ヲ育成スルモ、之ヲ応用スルノ才能ヲ得セシムルノ謂ヒニシテ、即チ完全ナル人物ヲ養成スルノ術ナリト云フベシ。」⁹⁾と前置きして、次に、精神上の教育、智育德育、身体上ノ教育即チ体育について、それぞれ次のように述べている。

「精神上の教育 精神上ノ教育、即チ心力ヲ育成スルハ、心理学ノ論ズル所ニシテ、其目的タルヤ、各種ノ心力發育ノ方法秩序等ヲ窮ムルニ在ルナリ。

智育德育 精神上の教育ハ、通常分テ二トス。専ラ智心ノ教養ニ関スルモノ之ヲ智育ト云ヒ。専ラ徳性ノ教養ニ関スルモノ之ヲ德育ト云フ。

身体上ノ教育 即チ體育身體上ノ教育、即チ

體力ヲ育成スルハ、體育學ノ専科ニ属スル所ニシテ、其目的タルヤ、支體ヲ發育シ機器ヲ完成シ。以テ精神ノ舎ル所ノ家屋、即チ身體ヲ強健ニシテ、心力發育ノ基ヲ為スニ在ルナリ。」¹⁰⁾と述べている。

さらに、第四篇體育、第一章、第一、體育ノ目的のところでも、

「體育ノ目的 體育ノ目的トスル所ハ、身體ノ健康ヲ保全シ、其發育ヲ助成シテ、各部偏長ノ弊ナカラシメ、以テ智徳養成ノ基本ヲ作り、且支體ノ強力ヲ増加スルニ在リ。」¹¹⁾として、智育、德育・体育の三育を基本とする考え方を保持していることがわかると共に、そこでの体育の目的も、教育の目的に一致するものであり、智徳体の三位一体のねらいをめざしていることがわかる。

伊沢は、教育界の人となる以前から、教育に対しては常に強い関心をもっていた。そして第一番中学幹事任中は、南校時代の恩師であった御雇教師フルベッキ（Verbeck, G. F.）から贈られた「ゼ・チャイルド」という書物に非常に感銘したともいわれているように、¹²⁾ 早くから欧米の教育思想にもふれていた。そうしたものが上に引用したような彼の教育観の形成にすすんだわけで、とくに知育偏重の教育に疑問をもち、知徳体の調和的発達をめざした教育こそ新しい時代の教育目標であると考えた点に注目される。

「学制」は布かれたものの、その実際となると非常に困難がともない、実際に「体操」の実施も遅々としていたときに、上述したようにいち早く体育の重要性を説き、また方法的にも「嬉戯」を創設するという先駆的な取り組みを行ったのである。

2) さて、もう一度さきの愛知師範学校開業式における伊沢の告諭についてみるならばそこでは、「唱歌体操ノ科以テ……」として、精神を健快にし、材幹を長成し、身体を強壯にするという、身体教育であると述べていた。このように音楽と体育は、心と体の教育であるとして、ともに身体教育に位置づけているように

伊沢の教育論の一つの特徴がある。

伊沢は、Page, D. P. “Theory and Practice of Teaching” (1873) をもとに『教授真法』を著作した。その “Theory and Practice of Teaching” の翻訳書フォン、カステール訳『彼白氏教授論』には伊沢と同様の見解が示されている。

「謡曲ハ至要トスルニ非ザレドモ、善良ナル教師ハ能ク其原理ヲ会得シ、且其術ヲ得テ亦一美事ト謂フ可シ。方今最良ナル学校ニテハ、皆音曲ヲ以テ心體ヲ操練スル具トナス。之ヲ奏スレバ実ニ快爽ヲ覺ユ。此ニ由リテ生徒自音声ヲ糾察スルコトヲ學ビ、自然詭方言語ヲ改良ス可ク。又知覚ヲ養殖シテ更ニ鋭敏ナラシム可シ。加フルニ音楽ハ、校中ノ和静ヲ得ルニ於キテ殊ニ功驗アリ。何トナレバ生徒久シク課業ニ従事シテ倦勞スル時ハ、必ズ耳語喧嘈終ニ粗暴ニ陥ルニ至ル。此時ニ及ビ、其氣ヲ発散セシムルモノハ音楽ニ如クハナシ。¹³⁾ (強調点については筆者)」と述べている。

善良なる教師は、謡曲の原理を会得する必要がある、音曲は、身心の操練の手段でありそれを行うことにより爽快を覚えるといっている。このことから、ここでも、音楽は、身心の健康の為に良く、身体教育としてとらえていることがわかる。

このような、音楽も身体教育であるという考え方は、伊沢の、「唱歌が身心の健康のために良し」という考え方と一致するものであり、彼が後に、米国へ留学し、現実に欧米の教育にふれた後にも変わらずに持ちつづけたものである。

たとえば、彼が、目賀口種太郎と連名で、明治十一年四月八日文部大輔、日中不二磨に提出した上申書の中でも、それを見出すことができる。「現時欧米ノ教育者皆音楽ヲ以テ教育ノ一課トス。夫レ音楽ハ学童神氣ヲ爽快ニシテ其ノ勤學ノ勞ヲ消シ、肺臟ヲ強クシテ其ノ健全ヲ助ケ、音声ヲ清クシ、発音ヲ正シ、聴力ヲ疾クシ、考思ヲ密ニシ、又能ク心情ヲ楽マシメ其ノ善性ヲ感動セシム。是レ其ノ学室ニ於ケル直接ノ功

力ナリ。……」¹⁴⁾ さらに、明治十五年十二月十二日学事諮問会々員が音楽伝習所を参観の節、唱歌の効益及該科開設の方法等について演述した内容の中でも其一「健全上ノ益」として、「夫レ人身ノ健否ハ身体内部ノ機関ニ属シ其外部ノ機関ニ属セザルハ世ノ知ルトコロナリ。故ニ四肢ノ如キハ之ヲ損復スルモノホ其健全ヲ保持スルアリ。之ニ反シテ内部ノ機関ニ於テ少シク其宜シキヲ得ザルトコロアルトキハ乍チ全身ニ影響ヲ及ボサマルモノ殆ド稀ナリ。然リ而シテ内部ノ機関ハ肺ヲ以テ最モ要機トス。抑肺ハ呼吸ヲ司ルノ官ニシテ呼吸ハ人体ニ資スルノ基本ナリ。……抑唱歌ハ声音ヲ練ルノ術ニシテ則チ体格ヲ正シ呼吸ヲ節シテ肺臟ノ強壯ヲ來シ人身ノ健全ヲ隆フスル所以ナリ。」¹⁵⁾ 其二として、「德育ニ資スルノ益」でも「唱歌ハ人性ノ自然ニ本ヅキ其心情ヲ感動觸激スル」¹⁶⁾ また、その後、明治十七年音楽取調成績申報要略に於いて、「音楽ト教育トノ関係」

「音楽ノ人心ニ感動スル影響ノ大ナル所以ハマタ更ニ喋々スルヲ要セザルモノノ如シ。……

長音階ノ楽曲ヲ演ズル者ハ心性ノ淵底ヨリ欲樂ヲ覺エ其快情發シテ容貌ニ顯ハレ之ヲ見聞スルモノトイヘドモ知ラズ識ラズ亦其快樂ヲ享クルニ至ル。而ルニ短音階ノ楽曲ヲ演ズル者ハ哀情計ラズ悲歎ノ感ヲ催フシ其外貌ニ露ハルルヤ覆ハントスルモ得ベカラザルニ至ル。是ヲ以テ幼時長音階ニ由テ薰陶ヲ受ケシ者ハヨク勇壯活潑ノ精神ヲ發育シ有徳健全ナル心身ヲ長養スルヲ得。マタ幼時短音階ニ由テ教練ヲ受ケシ者ハ柔弱憂鬱ノ資質ヲ成シ無力多病ナル氣骨ヲ求ムベシ。而シテ勇健ハ人ノ要スルトコロニシテ柔病ハ人ノ免ガレントスルトコロノモノナリ。是故ニ欧米ノ各国其唱歌ヲ学校教科ニ充ツルヤ皆此長音階ヲ採テ短音階ヲ棄ツ。是其子弟ヲシテ勇健快活ナラシメンコトヲ期シ鬱閉無力ナカラシメ骨軟柔ノ幼生ヲシテ支體ヲ激動セシムルハ其害却テ少カラスト是レ有名諸家ノ確説ナリ故ニ今下等小学ノ教科ニ嬉戯ヲ設ケ即チ左ノ図ニ因テ其一二例ヲ示明ス」¹⁷⁾ と述べている。

以上の例にみられるように、伊沢は唱歌が心

身の発達や健康の保持・増進の上に効果があると認識していたことが知られる。こうした認識がやはり幼児の体育を実施するときの「嬉戯」の発想につながっていたのではないかと考えられる。この点は、とくに最後に引用した個所に明らかにみられると思う。

4. わが国への幼稚園の紹介と 唱歌遊戯

伊沢が、フレーベル主義の影響を受けたことについては、さきにふれたところであるが、以下においては、まずはじめに、その当時、わが国に紹介された欧米の幼稚園教育書を取りあげて、そこにおける唱歌遊戯について検討してみたい。

1) 伊沢の「嬉戯」の報告が載ったのは愛知師範学校年報（「文部省第2年報」明治7年）であるが、明治7年12月28日発行の『文部省雑誌』、第27号には、「米国教育寮年報書抄訳」として、「幼稚園ノ説」が載っている。¹⁸⁾ 原著者名は、「ジョン・クロース」と記されている。

まず、「教師須知ノ事件」の項には次のような記述がある。

「稚児教育法ノ最モ緊要ナル者ハ、体操遊嬉及ヒ、『フレーベル』氏ノ兒輩ヲ誘導スル者ニ授與セシ解釋ヲ齊備スルニ在リ。此體操遊嬉及ヒ解釋ヲ、全ク通曉スルハ、一種ノ勉強ニ属シ、能ク之ヲ用ニ適スルハ、一種ノ技藝ニ属シ、其意義及ヒ功驗ヲ知り、又之ヲ施與スル次序方法ヲ知ルハ、一種ノ學科ニ属ス。年少ノ教師、善ク以上ノ數件ヲ取捨シ、稚児ノ年ニ応シテ之ヲ教ヘ、又、体操ノ時間ヲ斟酌シテ、兒輩ノ心力ヲ疲倦セシメサルヲ要ス。教師縦ヒ人ニ過クルノ才學アリトモ、能ク兒輩ノ資性ヲ通知セサルトキハ、其知識ヲ誤用スルノ患アルナリ。」¹⁹⁾（強調点筆者）

ここでは、体操遊戯およびフレーベルの教育法が幼児教育法として最も緊要だとし、児童の年令に応じた指導の必要を説いているのだが、

ここには、上述の伊沢の報告中における「唱

歌嬉戯ヲ興スノ件」にみいだされる見解に類似したものがあることに気づかれよう。

また、「幼稚園演習方法ノ注解」の項においては、「……此游嬉ハ、本ト教訓ト歡樂トヲ合セテ作レシ者ニシテ、常ニ之ニ附スルニ歌曲ヲ以テス。又、謂ハユル運動戲アリ。此戲ハ、天然ノ力ヲ借り用キル所ノ者ニシテ、即、風車、水車、等ノ如キ是ナリ。又、飛鳥、游魚等ノ態ニ効ヒ、又、桶匠、磨工、農夫等ニ模似シ、種ヲ播キ、草ヲ刈リ、禾ヲ打ツ、等ノ状ヲ為シ、凡テ此類ノ遊嬉ニ因テ百般ノ事情ヲ知り、且能ク恩念ヲ綜合スルコトヲ得ルナリ」²⁰⁾として、幼稚園での遊嬉の実際指導の方法について、具体例をあけて説明している。ここであげている「運動戲」の具体例は、後でふれるが、我が国の幼稚園教育の指導書となった『幼稚園記』、『幼稚園』の二冊の中に示されているものと全く一致する内容のものである。

こうして、すでに明治7年、文部省雑誌を通して、アメリカ及び諸外国の幼稚園教育の実情の一端が紹介され、フレーベルの幼稚園教育の方法が説かれている。これから考えるとき、この記事が掲載された当時我が国に於ても、文部省をはじめとして、教育界に就学前の幼児教育への関心が芽生えつつあり、明治9年の東京女子師範学校附属幼稚園の開設に向って、徐々に胎動し始めていたと推測される。

2) さて、上述の「幼稚園ノ説」の後に、明治9年には大系的な幼稚園教育の案内書が出版された。それが桑田親五訳『幼稚園』（明治9年1月、文部省）と関信三訳『幼稚園訳』（明治9年7月、東京女子師範学校）である。

両書は、ともに外国のフレーベル主義に立つ幼稚園教育の実際的方法について詳説した案内書を翻訳して成ったものである。実際に、日本において幼稚園が創設されるときには、これらの書物に依拠するところが大きかったのである。両書の中で説かれている体操や遊戯に注目しなければならない。

『幼稚園記』は、米国医生、ダウエイ氏(Adolf Douai)が、ニューヨーク師範学校で講じた英

文の「幼稚園論」を明治9年7月、東京女子師範学校訓導、関信三氏が訳述したものとされ、²²⁾ 和綴り四冊からなっている。

この書で「大教師、フレデリック、フレーベル氏ノ幼稚園ヲ創設セシ原意ハ、幼稚入校ノ志ヲ誘引シ、且ツ嬉戯欲楽ヲ以テ文学勉強ニ結合シ而メマタ身食ニ依テ身體ヲ長養スル如ク、意食ヲ以テ心意ヲ長養スルモ亦タ此ノ如ク、容易ニ誘導シ得ルトノ三箇ニ過キス。乃チ同時ニ良心ノ教育モ亦タ容易ニ開進スルヲ得ベシ。是レ幼稚生徒ノ恒ニ其幸福ヲ甘受スルヲ以テ、欣然自ラ學藝ヲ感覺シ、他ヨリ故意ニ教化スルヲ要セサルノ地位ニ在ルヲ以テナリ。」²³⁾ として、幼児には幼児にふさわしい活動を与えることが大切であり、嬉戯欲楽において楽しく、全体的に彼らの能力を育成し、子供らしい心情を正しく導くことが必要であると主張しているのである。

まず、第一に注目すべき点は、「楽曲調和ノ謡歌」について述べているところで、次のように説いているところである。

「毎朝課業ヲ始終スルニ必ス一篇ヲ謡吟シ以テ兒女ノ情性ヲ快活ナラシムヘシ、凡ソ幼稚兒女ヲシテ倦却セシメ易キ所餘演習ノ如キハ常ニ此謡唱ヲ以テ其因慫ヲ慰勞スヘシ、即チ体操ノ若干、遊戯ノ大約ハ必ス謡歌ニ合調スルヲ要ス」²⁴⁾ (強調点筆者)

幼児が倦怠に陥り易いような「演習」、すなわち体操や遊戯には唱歌をとみなわせ、疲れを癒すことが必要であるというのである。こうした考え方にしたがって、以下にみられるように「体操課」、「初段遊戯課」、「心性課」等において、それぞれ唱歌をとみなした体操や遊戯の実際を説明している。

まず、「体操課」については、次のようにいう。「夫レ兒女ノ幼稚園ニ適齡ナル輩ノ体操課ハ最も輕易ナルモノヲ要ス。茲ニ就テ三重アリ。

第一ニ、立坐二位ノ挙動ナル体操ニ依テ、身心ノ洪結ヲ弛緩スルコト

第二ニ、生徒ノ健康及ヒ其四肢ノ安易ニシテ

且ツ溫稚ナル容儀ヲ顯スコト

第三ニ、兒輩女ヲシテ韻節ヲ愛シ、氣力ヲ保チ、且ツ爽快ナル品行ヲ慕フノ心志ヲ励マサシムルコト

以上ノ目的ヲ扶持セント欲セハ、謡歌若クハ彈琴ヲ以テ相ヒ随フヘク、而メ立歩ノ体操ヲ交換スルヲ要ス」²⁵⁾

として、幼児の体操は、幼児に適した最も輕易なものであること、そしてその体操は、唱歌又は、ピアノの伴奏を伴って楽しく行われることが大切である、としている。さらに、それによって、身体と精神が規則正しく活潑に発達し、健康が保持され、身体はしだいに美しく、端正に、しかも、礼儀正しい態度が養われ、音楽や詩を解する心も育ち、身心共に調和的に発達するという。

そして、「幼稚園ニ於テ殊ニ專要ナル体操ノ茲ニ結科スヘキモノハ、謡歌ヲ以テ結合セル競馳及ヒ競歩ナリ。吾輩茲ニフレーベル氏ノ創設セシ此科ノ各種ヲ兒女ノ為メニ更ニ保薦セントス。」²⁶⁾ として、幼稚園において、体操と唱歌を結合した科こそ、フレーベルの創設したものであると述べている。

次に、「第一科謡歌」の「初段遊戯課」については、

其一篇	^{ウゴキ} 動揺	其五篇	猫鼠
〃二〃	攀木	〃六〃	農夫
〃三〃	^{フリコ} 擺子	〃七〃	蝸牛
〃四〃	盲想	〃八〃	行進

をあげ、それらについて具体的な遊戯の実際の方法を解説している。

さらに、「後段心性課」として、次のような二十三篇の唱歌遊戯の題材が紹介されている。

其一篇	夏	其十三篇	窮兎ノ哀訴
〃二〃	鳥	〃十四〃	我父家ニ歸ル
〃三〃	初夏	〃十五〃	幼稚園ヨリ歸ル
〃四〃	残冬	〃十六〃	月又星
〃五〃	五月	〃十七〃	盆花
〃六〃	冬	〃十八〃	赤子ノ看護

其七篇 雪	其十九篇 跳舞
〃八〃 誕月	〃二十〃 晩歌
〃九〃 氷上の小童	二十一〃 ^{ブランコ} 揺動
〃十〃 秋又花	二十二〃 遊戯方ニ終ル
十一〃 燕	二十三〃 家ニ歸ル
十二〃 秋	

そして、「以上心性課二十三篇ノ中ニ就テ或ハ全篇或ハ其数語ヲ、義ニ随ヒ、文ニ応シテ、肢体ヲ運動シ、以テ謡唱スルトキハ、自ラ兒女ノ遊興トスルニ足レリ、……」²⁷⁾として、唱歌に合わせて遊戯をすること、また、そのためのいくつかの例が示されている。

第二に注目されるのは、附録の第三章にある「戯劇」である。

この附録は「譯者曰、此一卷ハ、ミス・ヒーポディ、及ヒミシス・マーン、ノ撰述セシ幼稚園案内ニ就テ、其最モ緊要ナル数章ヲ抄譯シ、以テ本篇ノ補遺ニ供ス。」²⁸⁾とことわっているように、アメリカの幼稚園教育運動の指導者であったエリザベス・ピーボディ (Elizabeth Palmer Peabody. 1804~1894) と、その妹でホレース・マンの夫人であるメアリ・マン (Mary Tyler Mann, 1806~1887) の共著「幼稚園案内」²⁹⁾ から採って、補ったものである。

ここでの「戯劇」には次のような唱歌遊戯があげられている。

鳩巢	手車
窟中ノ兎	^{ユケヤ} 桶匠
杜鵑	游魚
風車	^{カザミ} 風信規
鋸者	

これらの唱歌遊戯は、前にも述べたように明治7年の文部省雑誌、第二十七号で紹介されているものの題名と一致するものであり、また、後にふれる、「幼稚園」の中であげられているものとは題名・内容ともに一致している。

そしてこれらの戯劇は

「已上諸戯ノ説明ハ、唯幼稚園師ノ授業課ニ於テ曾テ傳習セシ、身軀演習ノ通法ニシテ、之ヲ幼稚園ニ實際施行スルニ當テ、其幼兒ニ裨

益アルヤ実ニ筆舌ノ容易ニ悉罄スル所ニアラス。」³⁰⁾と述べているように、身体マタの訓練としてとらえていることが重要である。

次に、『幼稚園』の内容についてみることにしよう。これは、英国ロンゲ氏の「英国幼稚園」³¹⁾と題する著書を桑田親五が翻訳し、明治9年1月~同11年6月にかけて文部省から出版された（和綴3冊）ものである。

この書で、幼児の身体活動に関しては、巻下の「音楽の体操マタの事」において述べられている。

ここで、体操は最も肝要のものであり、稚児は、只飲食のみで育つものでなく、新鮮な空気と日光、適宜の体操をさせることが必要である。古人、キケローが、「健康の精神は惟よく健康の體に存すること」³²⁾と言っているように、「フレトリック・フレベール」は、体操は稚児」にとって教育上欠くべからざるものであるといている。

そして、体操を実施する際に、守らなければならない規則があるが、とくに幼児の体操においては、長時間同一の体勢をさせないこと、そして楽しく行わせるために、適宜の歌を伴って行うことが大切であると指摘している。

後の点に関しては、さらに「此體操は稚児にもの適する者にして、稚児のおきなご自發みずからはつめい明ところす所なり、而して実地の教育に従事する者は、此發明じつちせる體操を集めて適宜の歌を作り、音楽に合すべし」³³⁾といい、幼児の日常の遊びや運動、生活動作の中で、自然に行っている、幼児の生み出した動きを集めて、それに適した歌を作り、音楽に合わせて行うことが望ましいと述べている。

そして、実際に31の唱歌遊戯の題材と方法が解説されている。その主題のみを掲げるならば、次のようである。

- 第一 鳩舎ノ歌
- 〃二 睦マシキ家ノ歌
- 〃三 楽キ景色ノ歌
- 〃四 穴兎ノ歌
- 〃五 杜鵑ノ歌

- 第六 魚ノ歌
 〃七 太陽系ノ歌
 〃八 磨車ノ漏計ヲ打ツ歌
 〃九 風車ノ歌
 〃十 水車ノ歌
 〃十一 さけふり 擺ノ歌
 〃十二 看風旗ノ歌
 〃十三 籃ノ歌
 〃十四 鳥巢ノ歌
 〃十五 蜂ノ歌
 〃十六 農夫ノ歌
 〃十七 鋸匠ノ歌
 〃十八 桶匠ノ歌
 〃十九 孤輪車ノ歌
 〃二十 兒童祝賀ノ歌
 〃二十一 體操小教師ノ歌
 〃二十二 遊球ノ歌
 なお、二十三以下は、主題が記されていない。

以上の主題を見ると明らかなようにこれらは『幼稚園記』の「戯劇」において示されていたものと同じものであることがわかる。

その中から一、二例を取りあげて具体的に検討してみたい。

先ず『幼稚園記』の「風車」だがこれは『幼稚園』での『風車ノ歌』にあたり、前の文部省雑誌、第二十七号でも「天然ノカヲ借り用キル所ノ者ニシテ即風車水車等ノ如キ是ナリ」³⁴⁾としてふれられていた。この「風車」の方法は次のようである。

風 車

兒童四名ヲ一組トシ、各兒ヲ四方ニ分テ、環列シ、而メ西兒ハ其右手ヲ以テ東兒ノ右手ニ結合シ、北兒モ亦タ南兒ニ於テ此ノ如ク結合シ、以テ旋行ス。此ノ如ク左右両手幾次モ交換シ、或ハ左旋、或ハ右旋、以テ風車ノ回転ニ擬ス。其歌ニ曰ク、

觀ヨ風車ノ旋轉スルヲ。疾風此ノ如ク吹き過ル時。風車旋轉休ム時ナシ。曾テ怠惰ノ情ヲ表セス。

觀ヨ水車ノ旋轉スルヲ。急水此ノ如ク流れ來ル時。水車旋轉休ム時ナシ。曾テ怠惰ノ情ヲ表セス。

同調ノ楽曲ヲ以テ風車ヲ水車ニ転戲スルヤ、群兒ヲ円線ニ環列シ、而メ中央ニ於テ四名或ハ六名ノ兒輩ヲ四方或ハ六方ニ環列シ各兒右手ヲ以テ其偶ニ結合スルコト前戯ノ如シ、此ヲ第一兒トス。而メ更ニ四名或ハ六名ノ第二兒ヲ第一兒ニ連接スルニ、其右手ヲ以テ彼左手ニ結合ス。而メ兒輩ノ員数衆多ニシテ車輪ノ広大ヲ要スルトキハ、第三第四ノ兒員ヲ増加連接シ、以テ車幅ヲ長延スヘシ。此ノ如ク、列次既ニ整頓スルトキ、群兒方ニ起步旋行ス。而メ左手右手ヲ交換シ、或ハ左旋右旋スル如キ。亦タ風車ニ準知スヘシ。此戲ヤ所餘ノ戯劇ニ比スルニ稍騒雜ニシテ、且ツ其中央及ヒ周囲ノ位置ニ随テ、群兒旋行ノ速力ニ自ラ等差アルヘキヲ以テ齊整ノ運動ヲ為ス殆ト難事ト雖モ、亦諸戯中ノ最モ逸興トス。」³⁵⁾

『幼稚園記』と『幼稚園』の両方に唱歌と遊戲の方法は解説されているが、楽譜は示されていない。原著には、次のような楽譜が掲げられていた。³⁶⁾

XII. & XIII. Windmill and Water-Wheel.



or, XIII.

See the water-Wheel, how she goes,
 While the water freely frows, &c.

我が国の幼稚園での実際の唱歌遊戲は、はじめのうち、『幼稚園記』や『幼稚園』のものを参考にして、保母さんがわが国の幼児用のものに作りかえたり、創作したりしたものをういたようである。

この風車については、原著の歌詞を幼児用にやさしくして、豊田英雄作の次の様な唱歌によって遊戯をしたのである。

- 一、かぎくるま 風のまに—めぐるなり
やまずめぐるも やまずめぐるも
二、みずぐるま 水のまに—めぐるなり
やまず めぐるも やまずめぐるも 37)

つづいて、『幼稚園』からは、「第一鴿舎ノ歌」をみることにする。『幼稚園記』の「鳩巢」と同様である。

我等鴿舎ヲ開キ総テ其鳥ヲ放タン。鳥ハ
田畝ニ飛ビ且草原ニ飛テ其自由ヲ得ルヲ
喜ブ」鳥飛帰ラバ我等其舎ヲ閉サシ且之
ニ暇ヲ告ゲン

鴿舎あけて 鴿を放そ

稚兒等円形中を出て、行く

鴿は何処へ行た田畝に遊び草原に遊ぶ」

円形を出てくる稚兒の遊ぶうちは

くりかえし此句を謡ふなり

早く 帰ろ鳩舎閉よ

声を高ふして三度此句を謡ひ円形

に帰るべきを示すなり

帰らぬから閉よソラ閉マツタ」

此句を謡ふ時ハ帰り来るとも円形に

入る能ハざるなり

此遊は稚兒四分の三は手と手を握りて円形を作り、かりにこれを鴿舎と為し、其他の稚童は此円形中に並び立て鴿の状を為すなり。首の句を謡ふとき円形を作れる稚兒等、皆臂を伸ばして円形を大にし、その中央にありて、鴿の状を為す者は、羽翼の擬して腕を動かし円形の外に走り出て、部屋或は庭園などに遊び志うして第五句を謡ふを聞き、速に鴿舎に帰り結句を唱ふとき漸次に円形を縮むるなり。帰る遅き時は、他の稚兒に請はざれば円形中に入るを得ざるなり。鴿舎の図を考へ見るべし

此遊は円形を作りて（前の體操図の第六の體勢の如く）臂を伸ばし鴿の状をなして動し、奔走するに因りて、全體の筋絡を使用せしむるな

このうでくび ふとらす てわざ よう
り」此 腕の運動は手芸の敏捷を要する為の
りようはう
良 法なり

校正者曰ク西洋ノ諸歌ヲ訳シテ我国ノ音調トナシ、歌ヒ且舞フハ極テ難シ、故ニ、今試ニ其歌ノ大意ヲ、我国ノ音調トナシテ、以テ示ス。余ハ皆直訳ナレバ、読者其ノ意ヲ領セヨ 38)

この楽譜も原著では次のようである。

III.

The Pigeon-House.

We o - pen the pi - geon - house a - gain. And set all the
hap - py flut - tlers free. They fly on the fields and gras - sy
plain. De - light - ed with joy - ous li - ber - ty; And when they re -
turn from their mer - ry flight, We shut up the house and bid them good night.

39)

この唱歌遊戯についても、前に記した「風車」と同様に、わが国での実際は、これ等の保育書から題と意味を参考にして、豊田英雄等の保母さんが、作りかえたものを用いたのである。それを次に記す。

家 鳩

いへばとの すのとひらきて
はなちやる ゆくゑやいづこ
やまにのに しばふのはらに
あそぶらん あそびてあらば
かへらなん とくかへらなん
かへらずば すのととちてん
すのととちてん

幼児が手をつないで環をつくる。これが鳩の巢になる。鳩になる子は二三人別にきめる。さて始めは鳩は巢の中にはいっているが、「すのとひらきて」でつないでいる手を離す。すると鳩は巢から出てわきへ行って遊んでいる、やが

て歌が「とくかへらなん」のところへくると鳩は急いで帰ってくるといふごく簡単な遊戯である。⁴⁰⁾

そして、作曲は、宮内省式部寮雅楽弓員作人で興行業、東儀季芳、芝葛鎮等の雅楽寮の人の作曲によるものであり、わが国古来の、宮商^{キウシヨウ}角^{カク}徵^チ羽^ウを基礎とした施律法によって一越調^{イチコツ}双調調^{ヂョウ}平調調^{ヒョウ}黄渉調^{バンシキ}盤渉調の調子によって作曲されたものであった。「風車」についてみると、

風車 歩拍子三十二

徵^{カク} 徵^{ガク} 徵^グ 角^ル 商^メ 商^カ 角^セ 徵^ノ 角^ベ 商^ハ
 宮^メ 宮^ロ 商^グ 商^ル 角^メ 角^カ 徵^セ 嬰^ハ 嬰^メ 宮^ロ
 嬰^メ 宮^ロ 徵^グ 角^ル 商^メ 角^カ 角^セ 徵^ノ 角^ベ 宮^メ 宮^ロ

というものであり、西洋楽譜が導入される明治14、5年頃までこれが用いられたようである。⁴¹⁾ともあれ、わが国の唱歌遊戯の実際は、上述してきたようにフレーベル主義の幼稚園教育の方法の一つとして展開されていったわけである。

ところで、諸外国に目をむけると、フレーベルの幼児教育法は、ドイツ国内にとどまらず、それは世界各国に伝えられ、広く幼稚園教育運動として展開しつつあったことがみいだされる。

1816年、カイルハウ学園にはじまるフレーベルの幼稚園は、一時プロイセン政府の反動的な文教政策のもとで禁止され、幼稚園教育運動は停滞したけれども、1860年禁令が廃止されると、マーレンホルツニビューロー夫人⁴²⁾を名誉会長にした、『ベルリン・フレーベル主義幼稚園促進婦人協会』が結成され、1860年代、フレーベル主義幼稚園運動が進展した。

そして、ドイツにおけるフレーベル主義幼稚園運動のリーダとなったマーレンホルツニビューロー夫人やロンゲ夫妻は、プロイセンの幼稚園禁令の間、外国でフレーベル主義幼稚園を

ひろめるために尽力した。そうして、19世紀後半には、フレーベル主義の幼稚園運動は世界各国に普及していくのである。

イギリスでは、ロンゲ夫妻が1851年にドイツの子ども達のためにドイツ語を用いた幼稚園を開設した。1854年には、これは、イギリスの子供達にも解放し、英語を用いた。そして1855年「英語キンダーガルテンの手引」一さきの「幼稚園」の原著である一をつくった。これはイギリスでのフレーベル主義運動の紹介に多いに役立ち、多くの人々に共感をよびおこした。

一方、アメリカにおいては、1860年に前述したエリザベス・ピーボディーが、ボストン市の私宅に英語会話の幼稚園を開設したのが最初であった。その後、彼女は、ドイツを訪問し、フレーベルの教育法を学び、帰国後、フレーベル主義の普及発展に多大の努力をはらった。そして幼稚園教員の養成機関をつくる必要性を感じ、1868年にその養成所を開設した。これはやや遅れて1873年にニューヨーク市にヘンリエッタ・ハイ・ストス (Mrs Henrietta B. Haines) によって開設された幼稚園教員養成所とともに、アメリカにおけるフレーベル幼稚園運動の進展に多いなる貢献をしたものである。

フランスについてみると、ここではフレーベル主義が、1855年以後、マーレンホルツニビューロー夫人の活動によって導入された。フランスでは上流階級のための幼稚園と、勤労者のための託児所という二重構造をとるが、それら両者にフレーベル主義が導入されしだいに近代化されていったのである。⁴³⁾

このようにして、フレーベル主義の幼稚園教育はしだいに欧米諸国で普及・発展していったのである。そして、わが国への幼稚園教育の導入もそうした欧米の中心的指導者として活躍したエリザベスニピーボディーやロンゲ夫妻等の文献の翻訳・紹介に大きく依存しながら行われたものであり、そうしたフレーベル事業の幼稚園教育の一環として唱歌も紹介され、それが実践に移されていくという方向をとったのである。

伊沢の「嬉戯」の実践というものを考えるとき、こうした内外におけるフレーベル主義の幼稚園教育運動の動向とそこでの唱歌遊戯の展開を考慮に入れていかなければならないと思う。従来の体育史研究における伊沢の「嬉戯」の実践のとりあげ方をみた場合、こうした全体的な動きと関連させてみるものが少なかったようである。そこでは、どちらかといえば、伊沢の実践を孤立的に位置づけることに傾いてしまう。しかし、前述したような事情を背景としてみるならば、伊沢は、すでにそうしたフレーベル主義にふれて、いち早くその実践を試みたものであり、それはやがて東京女子師範学校附属幼稚園の開設以後に本格的に導入されるようになる「唱歌遊戯」の先駆となっていることが明らかにになる。

5. 結 び

以上、伊沢の「嬉戯」の実践を、彼の教育観および当時の内外における幼稚園教育の動向との関連において検討を行ってきた。

第一には、伊沢の「嬉戯」の実践と彼の教育観との関連の問題である。

伊沢は、それぞれの機会に言及していることからわかるように、彼の教育観は、フレーベルの影響をうけているところが多かった。彼の教育観の基調には、知育、徳育、体育の三位一体による完全なる人間の育成という目標があったのだが、とくに人間形成の萌芽が見られる幼児期の教育に関して、その幼児期の発達的特徴をふまえて教育を行う必要があるとの認識をえている。

そうした認識の上に、さらに伊沢の教育観には独特な認識があった。すなわち、彼は音楽を体操と同じく「身体教育」という同一の範疇でとらえ、それらは一体的のもの、並行すべきものとしていたのである。このような認識が、「嬉戯」の実践と深くかかわっていたのである。

第二に、伊沢の「嬉戯」の実践を当時における内外の幼稚園教育運動の動向に位置づける問

題である。

この点では、フレーベル以後の幼稚園教育運動の展開があり、そこでの動きが日本にも紹介されはじめていたわけで、そうした日本におけるフレーベル主義への方法的関心の芽生えが伊沢の周辺にはあったことは確かであり、いち早く「嬉戯」という形をとった具体的な実践に組んだものとみられる。そして、それはその後において、欧米のフレーベル主義の幼稚園教育運動の指導者たちの指導書の翻訳・紹介によって大幅に導入されることになる唱歌遊戯の実践の先駆となっていたのである。彼は、しかも単なる翻訳・模倣ということではなくて、日本の在来の素材を生かしたかたちで構成しようとしたわけである。このことは、当時の欧米のフレーベル主義幼稚園教育の指導者とその翻訳・紹介書を検討することによって一層明らかにみとめられたところである。

注

- 1) 木下秀明「学校体育におけるダンス的教材の史的考察」『新体育』35巻8号 p.26 昭和40年
- 2) 岸野雄三「日本の学校遊戯史—昭和初年頃までの小学校を中心として—」『新体育』33巻10号 pp.21~23
- 3) 今村嘉雄著「日本体育史」p.321 不昧堂昭和45年
- 4) 戸倉ハル「明治初年のゆうぎ」『新体育』29巻6号 p.19 1959年
- 5) 「愛知師範学校年報」『文部省第二年報』附録 pp.363~364 明治7年
- 6) 伊沢修二「幼児に課する唱歌遊戯の話」『婦人と子供』第1巻第1号 pp.61~62 p.66 明治34年
- 7) 『愛知週報』第78号附録 pp.8丁~9丁18号附録 pp.8ウ~9ウ明治7年7月
- 8) 伊沢修二輯訳「教授真法」p.34丁明治8年10月24日
- 9) 伊沢修二著『教育学』明治15年（『明治文化全集』第10巻教育篇 p.462 日本評論社昭和3年）

- 10) 同上
- 11) 同上, p. 497
- 12) 楽石伊沢修二先生 p. 24 故伊沢先生記念事業会大正8年11月10日
- 13) Page, D. P. 著 フォン・カステール訳『彼白氏教授論』文部省 明治9年（明治文化全集第10巻教育篇p. 163 日本評論社昭和3年）
- 14) 「学校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業ニ着手スベキ、在米国目賀田種太郎、伊沢修二ノ見込書」明治11年4月8日（『伊沢修二選集』p. 244 信濃教育会 昭和33年7月25日）
- 15) 「示諭要旨」明治15年12月12日（『伊沢修二選集』p. 281 信濃教育会 昭和33年7月25日）
- 16) 同上, p. 282
- 17) 「音楽ト教育トノ関係」同上 pp. 301~302
- 18) なおこれにつづいて「イリザベス・ピーボディノ年報書中ヨリ幼稚園教育ノ進歩ヲ抄録シテ茲ニ論述ス」として、「米国及ヒ其他諸邦ニ於テ幼稚園教育ノ進歩ヲ論ス」が掲載されている。
- 19) ジョン・クロース「幼稚園ノ説」『文部省雑誌』第27号（明治7年12月28日 p. 12）
- 20) 同上, p. 20
- 21) 原著は, Adolf Douai, “The Kindergarten” で、国立国会図書館には、明治10年3月文部省交付、教育博物館蔵書印がある。4th ed. (1872) が所蔵されている。
- 22) 原著は, Johann & Bertha Ronge, “A Practical Guide to the English Kindergarten” とみられるが、国立国会図書館には、教育博物館蔵書印がある10th ed. (1877) が所蔵されている。
- 23) 関信三訳『幼稚園記』卷之一小引 p. 3 丁 明治9年7月
- 24) 同上, pp. 14 丁~15 丁
- 25) 同上, p. 19 丁
- 26) 同上, p. 23 丁
- 27) “ 卷一 p. 18 丁
- 28) “ 附録 p. 1 丁
- 29) 原著は, Mrs. Horace Mann & Elizabeth P. Peabody, “Moral Culture of Infancy and Kindergarten Guide” である。国立国会図書館には、明治10年3月交付、教育博物館蔵書印のある6th ed. が所蔵されている。
- 30) 関信三訳『幼稚園記』附録 pp. 12 丁~13 丁 明治9年
- 31) 原著は, Johann & Bertha Ronge, “A Practical Guide to the English Kindergarten” で、国立国会図書館には、教育博物館蔵書印のある10th ed. (1877) が所蔵されている。
- 32) 桑田親五訳「幼稚園」卷下 p. 21 丁 明治9年 文部省
- 33) 同上, p. 22 丁
- 34) 「幼稚園演習方法ノ注解」『文部省雑誌』第27号（明治7年12月28日）p. 20
- 35) 関信三訳『幼稚園記』附録 pp. 9 丁~10 丁 明治9年
- 36) P. Peabody and Mrs. Horace Mann’s “Kindergarten Guide” songs, p. 7
- 37) 倉橋惣三、新庄よしこ共著『日本幼稚園史』pp. 250~251 東洋図書 昭和9年
- 38) 桑田親五訳『幼稚園』卷下 pp. 23 丁~25 丁 明治9年1月 文部省
- 39) 注22) 国会図書館蔵書 p. 47
- 40) 倉橋惣三、新庄よしこ共著『日本幼稚園史』p. 246 東洋図書 昭和9年
- 41) 同上, pp. 267~269
- 42) Bertha von Marenholtz-Bülow, 1810~1893
- 43) 梅根梧監修『幼児教育史1』—世界教育史大系 21 pp. 257~331 pp. 368~371 昭和49年 講談社

附 記

今回の研究にあたり、資料調査に御便宜を頂いた東書文庫長 林 寛元氏及び中京大学図書館豊田分館清原 真玄氏に深く感謝する次第であり、ここに記して謝意を表します。